

年 組 名前：

風林火山

松尾芭蕉が谷村（都留市）を訪れるきっかけは、江戸で起きた「天和の大火」だった。深川に庵を構えていた芭蕉は、命からがら隅田川に飛び込んだ。谷村には藩の家老である高山樗牛に招かれて滞在した。再び江戸に戻ると「野ざらし紀行」「おくのほそ道」の旅に出る。大火事と谷村滞在は芭蕉の作風に大きな影響を与えたという▼同じく天和の大火で人生が変わった女性がいた。名は「お七」。大火から逃れた先で出会った相手と恋仲になり、再会したい一心で自宅に放火。火刑に処された▼お七の生まれが、十二支でいう「ひのえうま」とされる。「ひのえうまの女性は気性が荒い」という差別に近い迷信が、ここから生まれた。残念ながら1966年には「産み控え」が起きて出生数はぐんと落ちた▼ことし再び巡ってきたひのえうま。ほかにも迷信がある。火事が多いのだという▼9日午前1時、上野原市の大目出張所前から扇山を見上げた。テレビで見るとより、もはるかに山は近く、炎は大きく、煙は高かった。さほど長くいたわけではなかったのに、服が煙に燻されて帰りの車内はたまらなかった。付近に住んでいる方々は胸がざわめいて気が気ではないだろう▼昨年もちょうど今頃、から春先まで、山林火災の話題が続いた。扇山の火が早く収まってほしい。そして火の取り扱いにはくれぐれも注意して、「火事が多い」といういわれを「迷信」にしたい。(前)

(2026年1月13日付 山梨日日新聞1面)

問1 2026年は、^{じっかんじゅうにし}十二支で60年に1度の「ひのえうま」に当たります。1966年には、どのような迷信から、どのような現象が起きてしまいましたか。

- ・迷信：.....
- ・現象：.....

問2 「ひのえうま」には、火事が多いともいわれています。あなたが日頃、火事が起きないように注意していることを書き出してください。

.....

問3 松尾芭蕉の俳句です。中の句、下の句を選び、完成させてください。

- ・ 古池や ⇒ ⇒ ・ 夏草や ⇒ ⇒
- ・ 閑さや ⇒ ⇒ ・ 五月雨を ⇒ ⇒
- ・ 荒海や ⇒ ⇒

中の句 ⇒ ①あつめて早し ②蛙飛び込む ③佐渡によこたふ ④岩にしみいる ⑤兵どもが

下の句 ⇒ ④天河 ⑤蟬の声 ⑥水の音 ⑦夢の跡 ⑧最上川